

## 「五感で楽しむまち大賞」総評および「環境大臣賞」「審査委員特別賞」講評

進士 五十八（五感で楽しむまち大賞審査委員長）

審査委員長の進士です。今回、「五感のまちづくり」というコンセプトを環境省がお考えになったのは、私は大進歩だと思っているわけです。環境省の組織は責任を明確に担う行政ですから、大気とか水質とか、昔の典型7公害などに分野が分かれています。これは、公害対策をするときにはとても有効な手法だったと思います。問題点、ターゲットを絞ってそこに全政策力と技術力を投入し、最後の方では、国民的参加という運動論まで投入して、問題解決をするわけですから、環境問題を解決するという意味では非常に有効だったと思います。日本は相当程度に公害対策を実現して、「すごい」と褒められました。

ただ、アメニティの実現という意味では、まだ十分ではないというのが、かつてのOECDの指摘でした。それでアメニティ政策に転換した当時の環境庁長官が、今の石原都知事です。マスコミには「公害対策を捨てるのか」と嫌みを言いましたが、その見識は正しかったと思います。アメニティとは、アモーレ・愛のある環境というトータル環境です。そして今21世紀になって、まさしくそういう大きな環境としてとらえなければいけないというステージにきているわけです。そういう意味で、いままさに環境行政として本物のアメニティめざして今から本気でやるという最初にこの「五感」がとりあげられたということです。

通常の行政では、五感などというあいまいな科学的に数字にできないようなことに取り組むというのは、結構勇気が要るのです。市民レベルでは一人ひとり個人的に五感で感じるのは当たり前でしょう。日本の伝統文化から現代の都市問題まで、みんなそういう五感で感じて上手に対応すればうまくいくはずなのに、なかなかそうはいかなかったのは、やはり計量化して数字になり、客観化して、基準ができて、法律を適用してという手続きをやらないと、行政はやれない。ある意味で科学的、客観的、公平な行政をやろうとしたからでしょう。しかし本当は、国民を幸せにするのは一人一人の市民・国民が、「この国は本当にいいよね」「銭湯って、温まるね」「柚子の香りもするし、後の1杯のコーヒー牛乳もおいしいね」と、そういうところに結構本音の幸福感があるのではないのでしょうか。

そういう意味では、本当の市民のための行政と考えれば、「五感のまちづくり」は一番初めに来てもよかったはずなのです。しかし、それはできなかったというか、できないのです。法律や制度は、きちんできていて主観や感情を排除しているからです。それが基準行政を超えて、市民の心に届くテーマに取り組もうと、こう決断されてやっていこう、し

かもそれをただ行政がやるだけではなく、幾つかの民間団体と協力してやっていこうという、このやり方は大変面白い、うまいやり方、見事な取り組みだと思っています。

環境大臣賞は飛騨里山サイクリングです。株式会社美ら地球（ちゅらぼし）です。「美ら地球」というのは、語感もいいし、目指すべき理想も感じさせます。それよりも、活動そのもののエコツーリズムやグリーンツーリズムがやっと日本でも盛んになってきました。すばらしいことです。ツーリズムというと、先ほどの議論にありましたように、どうしても名所旧跡を訪ねるということでありすぎて、特に外国の方たちは既にこの段階は卒業している。われわれが向こうに行くのも、これはもう第1ステージでしかない。私は昔、観光計画もやりましたが、これまでの観光というのは珍しいもの、世界一、日本一、そういう珍奇性や希少性を追い掛ける段階が最初に来たわけです。

しかし、それは1度行けば分かるのです。2度3度行く、つまりリピーターを確保するのは、この美ら地球の皆さんがやっているようなプログラムツーリズムです。本当に、本物を体験する。できれば、そこに入って一緒に住んでみる。そういう滞在型、体験型です。美ら地球の皆さんは見事にそれを自転車というツールを使いながらやっておられます。サイクリングというのはスローです。時間を見ながら、「はい、次は〇〇寺です」「次、〇〇神社です」というのとは全くちがう。もう一つ重要なのは、そこに住んでいる生活者と深いコミュニケーションを取るということです。実際にそこに住んで暮らしている人と生で触れ合える。これはまさに観光の神髄です。そういう取り組みをガイドつきでやられたのは、特に日本を理解してもらおう民際外交としても大変大きな意味を私は持っている活動だと考えます。本当に、おめでとうございます。今後の継続を願っています。

そして、審査員特別賞も私の担当ですので、先にご説明します。「町の記憶 PROJECT 南千住 1000 枚の記憶」の皆さんです。千住すみだ川の皆さんの取り組みです。

このやり方はフロッタージュというのでしょうか。私は昔の人ですから、拓本といいます（笑）。五感の中に触覚という、最も微妙な五感があるわけです。環境を感じるのは視覚が大半で、8～9割です。しかし、本当に微妙なところで触るということがあるわけです。この触覚をまさに再発見している。もう一つ、ふつうは見えるものを扱うのですが、記憶という感じる時間を表現している。これが私はすごいと思いました。これは大事です。南千住だからやれるというか、南千住の持ち味、場所性ももう一つあると思いますが、東京は絶えず高層ビルが立ち並び、都市間競争ばかりを意識しているようですが、東京圏には何千万もの人間が住んでいて、そこには本当の暮らしもあるわけです。それを触るのです。

みんな、小学校のときからこれをやっていますね。机に傷を付けたり、紙を載せてざらざらとやったり、誰もがフロッタージュ風遊びはやったことがあるでしょう。その簡単な方法で町を把握する。しかも、それは個人の技ではなくて、大勢の市民でいっしょになって、町を感じようという。そういう意味では、この五感のまちづくりコンクールのねらい目に真正面から係わった活動だといえます。すばらしい。

あとの三つの賞は、それぞれの団体から講評があるようですが、知識で考える、非常に科学的に取り組みされた「エコピープル賞」もあり、柚子の里のように、今、日本では限界集落という情けない言葉が普通に使われている中で、高齢者の皆さんがしっかり日本の農の文化を表現しがんばっている、水尾の里がありました。それから、エコツーリズムに環境教育が入っている藤枝のお茶の取り組みもありました。皆さん、すごい。柚子風呂の後、お茶を飲んでエコの勉強をするというのはいかがでしょうか。それから、五感の写真もそれぞれ見事で、地域地域の五感の風景文化を教えていただきました。

本当に素晴らしい活動に立派な賞を出していただいてよかった。こうした受賞者の活動がずっと全国に広がってどこでも普通になるような時代を迎えたいものだと思います。皆さん、どうもありがとうございました。